

ほうまつ 宝松遺跡 3

—第5次調査—

大野城市文化財調査報告書 第214集



2024

大野城市

序

福岡県大野城市は、福岡平野南部に位置し、西暦665年に築かれた古代山城「大野城」にその名を由来する、古い歴史と自然に囲まれた緑豊かな街です。市域は南北に長く、大野城跡、水城跡、牛頸須恵器窯跡の3つの国史跡をはじめ、多くの文化財があります。

宝松遺跡は山田4丁目に位置し、これまでの調査の結果、中世から近世にかけての屋敷地や村落の広がりが明らかとなっています。

今回報告する第5次調査では、溝跡や土坑など、近世における旧山田村の集落の一端を垣間見ることができました。

今後こうした成果を積み重ねていくことで、ふるさとの先人たちの暮らしぶりが明らかになるとともに、今に生きる私たちが地域の歴史の積み重ねの上にあることを知る機会となることを期待しています。

本書が学術研究はもとより、広く一般に活用され、地域歴史の解明や歴史教育の一助となり、文化財愛護の精神を醸成する手掛かりとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書作成にあたりご理解とご協力をいただきました関係者各位に対しまして、厚くお礼を申し上げます。

令和6年3月31日

大野城心のふるさと館

館長 赤司 善彦

例言

1. 本書は、大野城市が集合住宅建設に伴って発掘調査を行った「宝松遺跡第5次調査」の成果報告書である。
2. 発掘調査は事業者より委託を受け、大野城市が行った。
3. 発掘調査は齋藤明日香、澤田康夫が担当した。
4. 遺物写真は株式会社写測エンジニアリングに委託し、牛嶋茂が撮影した。
5. 遺構実測図中の方位は座標北を表し、座標は国土座標（第Ⅱ系）を使用している。
6. 遺物実測図は仲村美幸、小嶋のり子、古賀栄子、篠田千恵子、小畑貴子、津田りえ、氷室優、松本友里江、眞田萌世が作成した。
7. 図面の浄書は小嶋が行った。
8. 遺物観察表は小嶋が作成した。また、遺物は総番号とし、挿図と図版で統一した。
9. 本書に掲載した遺跡分布図は国土地理院発行の1/25,000電子地形図を使用し、各市の遺跡包蔵地分布図をもとに作成した。
10. 本書に使用する土色名は『新版標準土色帳』農林水産省技術会事務局監修を使用している。
11. 本書の執筆は澤田・龍が行い、編集は龍が行った。
12. 本書に掲載した遺物・実測図・写真はすべて大野城心のふるさと館が管理・保管している。

本文目次

I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査体制	1
II. 位置と環境	3
III. 調査の成果	
1. 調査の概要	5
2. 遺構と遺物	6
IV. まとめ	11

挿図目次

第1図	既往調査区配置図 (1/2,500)	2
第2図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	4
第3図	調査区遺構配置図 (1/200)	5
第4図	SK01 遺構実測図 (1/40)	6
第5図	SK02・03 遺構実測図 (1/40)	6
第6図	SK01・02・03 出土遺物実測図 (1/3)	7
第7図	SK04 遺構実測図 (1/40)	8
第8図	SK04 出土遺物実測図 (1/3)	8
第9図	SD01・02・04 土層図 (1/40)	9
第10図	溝跡出土遺物実測図 (1/3)	10
第11図	ピット出土遺物実測図 (1/3)	10

表目次

第1表	宝松遺跡第5次調査遺物観察表	12
-----	----------------	----

写真図版

図版1	(1) 調査区全景 (北東から)	(2) 調査区北半遺構検出状況 (東から)
図版2	(1) SK02・03 完掘状況 (南西から)	(2) SK01 南東壁土層
	(3) SK02・03 北東壁土層	(4) SK02 遺物出土状況1 (南東から)
	(5) SK02 遺物出土状況2 (南西から)	

- 図版 3 (1) SK04 遺物出土状況 (南東から) (2) SD02 北壁土層
(3) SD02 完掘状況
- 図版 4 (1) SD05 北壁土層 (2) SD03 南壁土層
(3) SD06 南壁土層
- 図版 5 (1) SD01・03 完掘状況 (南東から) (2) SD04 完掘状況 (北西から)
(3) SD07・05 完掘状況 (南東から)
- 図版 6 遺物写真図版

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

宝松遺跡は、大野城市山田四丁目を中心に広がる古墳時代から近代にかけての複合遺跡である。これまでに4地点で発掘調査が行われており、北側に隣接する御笠の森遺跡と共に広い範囲で区画溝や建物跡、井戸などといった旧山田村に関連する遺構が確認されている。

今回の調査地は山田四丁目479番1・5、497番4で、集合住宅二棟の建築に伴い令和4年9月30日に確認調査を実施したところ、開発予定地の南半分から地表下80cmの深さで複数の遺構が確認された。建築に際しては杭の打設を行う予定であり、計画通り工事が進むと遺構が破壊されることから、事業者と当該文化財を保護するための協議を行ったが遺構保護は設計上困難とのことであった。そのため遺構にかかる南側建物の基礎部分について発掘調査を行う必要があると判断し、事業者との協議を重ねた。事業者からは令和4年10月30日に埋蔵文化財発掘調査依頼書・承諾書が提出され、令和4年11月1日付けで建設図面を添えて発掘届を福岡県教育長宛に提出したところ、令和4年11月18日付けで発掘調査を実施する旨指示が出された。事業者とは発掘調査を令和4年度、整理作業を令和5年度に実施することで協議が整い、令和5年1月10日から令和5年2月27日にかけて発掘調査を行った。調査は開発面積1469.17㎡中約300㎡について行い、また費用は全額事業者が負担した。

発掘調査の実施・報告書作成に際し、多大なるご理解を頂いた事業者並びに関係者の皆様には、記して感謝の意を述べたい。

2. 調査体制

令和4年度（発掘調査）

大野城市長	井本 宗司
大野城心のふるさと館長	赤司 善彦
大野城市地域創造部長	増山 竜彦
心のふるさと館文化財担当課長	石木 秀啓
係長	林 潤也、上田 龍児
主査	徳本 洋一
主任主事	秋穂 敏明
主任技師	山元 瞭平
技師	齋藤 明日香
会計年度任用職員	

(調査) 澤田 康夫、石川 健

(庶務) 小川 久典、清水 康彰、大塚 健三

(現場作業) 篠崎 繁美、東島 真弓、

安里 由利子、舩越 桃子、小林 敏子、坂本 泰子、

浅田 ふえ、川崎 敏次郎、佐藤 寛行、吉田 秀俊、

田中 良一
(事務補助) 山上 恵子、井之口 彩子

令和5年度(整理作業・報告書作成)

大野城市長
大野城心のふるさと館長
大野城市地域創造部長
心のふるさと館文化財担当課長
係長
主査
主任技師
主任主事
会計年度任用職員

井本 宗司
赤司 善彦
日野 和弘
石木 秀啓
林 潤也、上田 龍児
濱田 裕之(～6月)
龍 友紀、山元 瞭平
下川 みお(7月～)

(調査) 澤田 康夫、石川 健
(庶務) 清水 康彰、藤田 香
(整理作業) 仲村 美幸、小嶋 のり子、
古賀 栄子、篠田 千恵子、小畑 貴子、津田 りえ、
氷室 優、松本 友里江、眞田 萌世
(事務補助) 井之口 彩子、西村 恭子



第1図 既往調査区配置図(1/2,500)

Ⅱ．位置と環境

福岡県大野城市は福岡平野の南東部に位置し、南北に細長い瓢箪形の市域をなす。市域の北側には井野山・乙金山・四王寺山、南側には牛頸山とそこから派生する丘陵が広がる山に囲まれた地形である。市北部から中央の平野部には宝満山を水源とする御笠川が流れ、市の中央部で南部から流れる牛頸川と合流して博多湾に注いでいる。宝松遺跡はこの御笠川西岸沿いの沖積平野上に広がる遺跡で、近世山田村と推定される御笠の森遺跡の南側に位置している。

周辺は近世集落の廃絶後、昭和 20 年代ごろまでは水田として利用されていたが、戦後開発が進み、現在では住宅が密集する宅地となっている。早い時期に開発が行われたため長年の間遺跡の内容は不明瞭であったが、近年再び宅地開発される例が増加し、徐々にその様相が明らかとなってきている。ここでは、宝松遺跡の中心時期である中世から近世にかけての遺跡を概観したい。

中世以降、周辺では博多遺跡群が隆盛し、それまでの大宰府や鴻臚館にかわり中世都市「博多」が対外交易の拠点となる。この時期御笠川周辺で遺跡が増加するとともに、11 世紀後半以降、丘陵部の開発が進んで新たな集落が各地で営まれるようになる。集落では御笠の森遺跡で 11 世紀から 12 世紀後半にかけての井戸や区画溝等が確認されているほか、薬師の森遺跡、上園遺跡、天神田遺跡群などで瓦器や生産関連遺物が出土しており、このうち薬師の森遺跡と天神田遺跡では瓦器の焼成遺構も確認されている。集落単位で盛んに瓦器生産が行われたことが伺える。このほか墓地では、塚口遺跡、森園遺跡、松葉園遺跡で輸入陶磁器を副葬する土壙墓が確認されている。

その後鎌倉から戦国期にかけては様相が不明な遺跡が多いものの、御笠川西岸域の麦野遺跡群や石勺遺跡、川原遺跡、東岸域では立花寺遺跡や中・西コモリ遺跡、塚口遺跡、薬師の森遺跡、森園遺跡などで当該時期の遺構が確認されている。中でも大城山・乙金山の山裾に位置する薬師の森遺跡では輸入陶磁器が副葬された木棺墓・土壙墓や多数の方形区画が見つかったりなど、市域で有力者の存在が垣間見える。御笠の森遺跡では、この時期多数の井戸や方形区画が展開され、活発な活動が見て取れる。宝松遺跡では溝跡などが確認されているものの、既往の調査区では遺構は散漫である。

また戦国期の城郭として、岩屋城の向城であった乙金地区の唐山城や牛頸地区の不動城がある。現在では詳細な様相が不明となっているものの、江戸時代中期に貝原益軒が著した「筑前国続風土記」にその名が記されている。このほか、16 世紀代には御笠の森遺跡では多数の方形区画溝が展開し、近世まで継続して集落が営まれる。

近世には市内平野部の各所で遺跡が確認されており、後原遺跡や雑餉隈遺跡、錦町遺跡、村下遺跡、瑞穂遺跡などで、集落跡や近世墓が確認されている。御笠の森遺跡では方形区画溝は遅くとも 17 世代に廃絶し、以後の遺構はほとんど確認されない。『筑前国続風土記拾遺』には、同時期の洪水による全村移転の記事がみられ、古文書と発掘調査の結果が一致するという点で意義深い。また近隣には旧国道三号線に並行する形で旧日田街道が通っており、博多と太宰府の中間地点にあたる雑餉隈遺跡は「間の宿」として栄え、人々の往来も非常に盛んであった。このほか旧白木原の「本村」に比定される後原遺跡があり、地祿神社を中心とした近世集落の景観が明らかとなりつつある。



- | | | | | | |
|-------------|-----------------|-------------|-----------|------------|-----------|
| 福岡市 | 大野城市 | 22. 原口遺跡 | 34. 此岡古墳群 | 46. 瓦田後田遺跡 | 57. 永福遺跡 |
| 1. 井相田遺跡 | 11. 仲島遺跡 | 23. ヒケシマ遺跡 | 35. 原田遺跡 | 47. 古賀遺跡 | 58. 末次遺跡 |
| 2. 麦野B遺跡 | 12. 川原遺跡 | 24. 中・寺尾遺跡 | 36. 金山遺跡 | 48. 原ノ畑遺跡 | 59. 向川路遺跡 |
| 3. 麦野C遺跡 | 13. 御笠の森遺跡 | 25. 森園遺跡 | 37. 金ヶ浦遺跡 | 49. 大道端遺跡 | 60. 唐土遺跡 |
| 4. 雑餉隈遺跡 | 14. 宝松遺跡 | 26. 松葉園遺跡 | 38. 曲り目遺跡 | 50. 後原遺跡 | 61. 谷川遺跡 |
| 春日市 | 15. 村下遺跡 | 27. 御手洗遺跡 | 39. 笹原古墳 | 51. 御供田遺跡 | 62. 天神田遺跡 |
| 5. 駿河遺跡 | 16. 雑餉隈遺跡 | 28. 薬師の森遺跡 | 40. 釜蓋原遺跡 | 52. 池田・池之上 | 63. 水城跡 |
| 6. 駿河B遺跡 | 17. 御陵遺跡 | 29. 原口古墳群 | 41. 汐井川遺跡 | 遺跡 | |
| 7. 駿河E遺跡 | 18. 唐山遺跡 | 30. 雉子ヶ尾遺跡Ⅲ | 42. 中ノ原遺跡 | 53. ハザコ遺跡 | |
| 8. 立石遺跡 | 19. 善一田遺跡群 | 31. 雉子ヶ尾古墳群 | 43. 石勺遺跡 | 54. 梅頭窯跡群 | |
| 9. 先ノ原B遺跡 | 20. 王城山遺跡群 | 32. 雉子ヶ尾遺跡Ⅱ | 44. 瑞穂遺跡 | 55. 本堂遺跡 | |
| 10. 春日公園内遺跡 | 21. 古野遺跡群 | 33. 雉子ヶ尾遺跡 | 45. 国分田遺跡 | 56. 上園遺跡 | |

第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

Ⅲ．調査の成果

1．調査の概要

調査地は平坦地にあり、標高 17 m 程度の低地である。周辺は昭和 40 年代以降宅地化が進み、個人住宅が密集する地帯となっているが、近年の再開発により中世から近世にかけての集落様相が徐々に明らかとなりつつある。

発掘調査は令和 5 年 1 月 10～16 日、24～27 日にかけて調査区の表土掘削を行い、地表下およそ 80cm で遺構面を検出した。1 月 19 日より遺構の掘削、2 月 24 日に埋め戻しを終了し、現場撤収の後 2 月 27 日にすべての作業を終了した。調査では溝 12 条と土坑 6 基、その他複数のピットを確認した。

出土遺物は比較的少ないものの、中世の土師器や近世の陶磁器を中心にパンケース一箱分が出土した。



第 3 図 調査区遺構配置図 (1/200)

2. 遺構と遺物

今回の調査で検出した遺構は時期や性格が不明確なものが多く、明らかに近現代に造作されたものもあり、ここでは全体的な概要を述べ、近世以前の主要な遺構についてのみ概要を詳述する。

まず、SD06～SD12は方位を同じくし、畑の造作として手が加えられたものである。SD06・07はトレンチ状に幅1.3mで掘り下げられた溝で、60～85cmの深さを測る。ほぼ南北の方向を向き、溝底は北方へ下がっている。壁はほぼ直に立ち上がり、重機等で掘られた可能性が高い。溝底は黄茶褐色の砂（地山）で、埋土はそう時間を置かずに2層を成して一度に埋められているが、埋土の土圧により、その上面は暫く窪んでいたらしく暗茶黒色粘質土が溜まっていた。この最上層の埋土から輸入陶磁器の破片が数点出土したが、上層の耕作土を動かしたときの混ざり込みである。

SD08～SD12は方向を同じくし、畑の畝の形状を示す。但し、SD11・12は溝肩の形状から重機のキャタピラの痕跡とも考えられる。トレンチ状の溝と関連するものかと思われる。また、SX01は先述した溝群とは方向を異にするが、長方形の土壇の底と壁面を叩き漆喰で固める、いわゆる肥溜めと思われるが、円形のものが多い中で、方形のものは珍しい。SX02も小型であるが壁に同様な叩き漆喰が認められる。以下、近現代以前の遺構について詳述する。

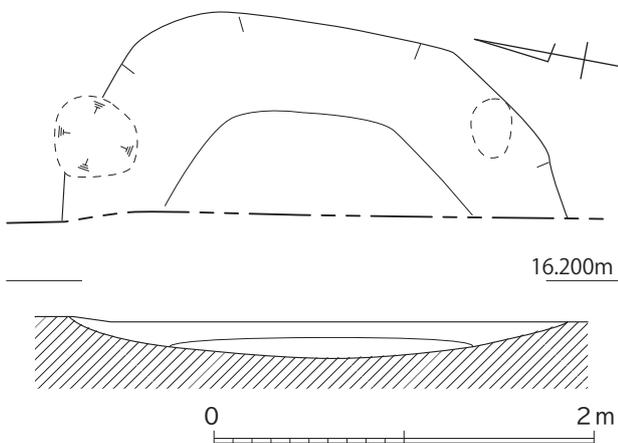
(1) 土坑

SK01（第4図、図版2）

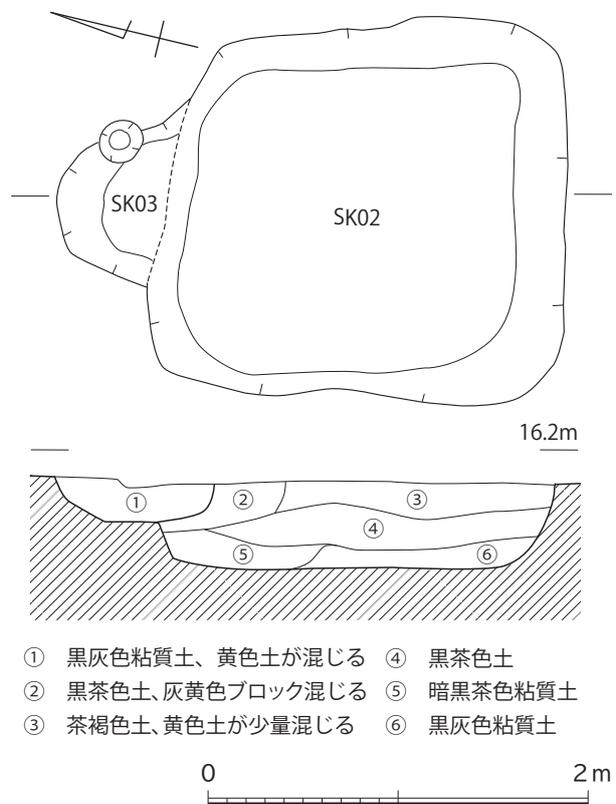
調査区の中央よりやや東寄りで、調査区の南辺に検出した。円形プランを呈するが、約半分は調査区外である。断面は浅いすり鉢状を成し、最深部で40cm程を残す。埋土は地山に含まれる白色砂を含む灰質の黒色土で、単一層である。

出土遺物（第6図、図版4）

磁器（1）白磁椀。高台は浅く削りだされ、見込みに段が入る。焼成は硬質で胎土は比較的粗い。太宰府分類V類。



第4図 SK01 遺構実測図（1/40）



第5図 SK02・03 遺構実測図（1/40）

SK02 (第5図、図版2)

SK01の北隣に検出した方形のプランを呈する土坑である。一辺が大略2mを測るほぼ正方形で、規模の小さな竪穴住居を思わせる形態であるが、壁は直立せず、やや傾斜する。深さは約45cmで、床面は平坦である。床面に柱穴等は見当らない。SD03を切り、SK03に切られている。

出土遺物 (第6図、図版4)

土師器(2) 小皿。口縁は短く立ち上がり、口径9.0cmに復元できる。底部は糸切りである。

瓦質土器(3) 鍋か。器壁はやや薄く、内面に三条の沈線が入る。上下が破損しているが内面から上部の割れ口にかけて煤が付着しており、破損後も使用されたと考えられる。

鉄製品(4) 用途不明の円環状鉄製品で、リング部分の断面は楕円形を成す。孔の内径は2.0cmである。

SK03 (第5図、図版2)

SK02を切り、円形に近い不整形のプランを示す。径80cm、深さ20cmを測る。埋土は黒灰色粘質の単一層である。

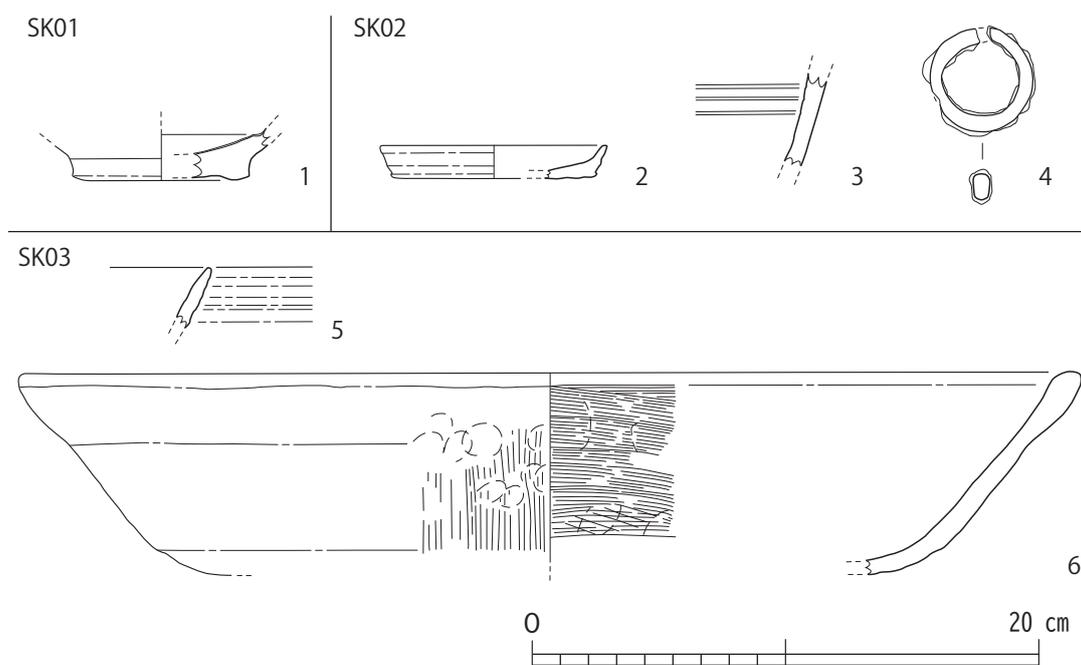
出土遺物 (第6図、図版6)

土師器(5) 杯か。残存高2.4cm。口縁部は緩やかなラッパ状に広がり、外面には凹線状の段が入る。外面の一部に煤が付着する。

瓦質土器(6) 鍋。八分の一ほどが残存し、口径42cmに復元できる。内面はハケ調整、外面はハケ後指オサエの痕跡が残る。側面には煤がやや厚く付着している。

SK04 (第7図、図版3)

調査区北辺の中央近くで検出した1.3m×0.9mを測る長方形のプランを呈する土坑である。逆台形の断面で、深さ30cm程を残す。平面プランはSX01、02と似ているが、叩き漆喰等は認められず、出土した遺物から見ても、それらとは性格を異にするものである。



第6図 SK01・02・03 出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物（第6図、図版6）

出土遺物は近代のものが多いが、一部中近世のものも混入している。ここでは近代の遺物も含め、特徴的なものを取り上げる。

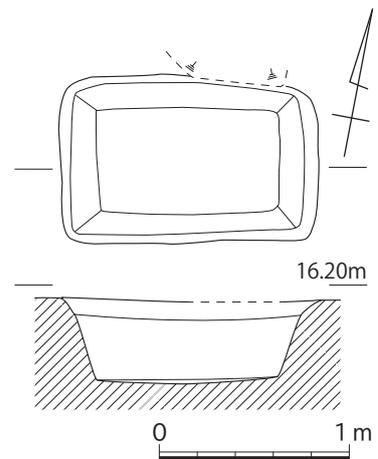
土師質土器（7） 鉢の口縁部片。胎土はマーブル状で焼成は軟質。内面はハケ調整である。

陶器（8・9） 8は小椀。底部が四分の一程度残存し、高台径4.0cmに復元できる。高台は低く三角形に削り出され、全面に薄く施釉される。見込みと高台には砂目が残る。焼成はやや軟質。9は腰折皿。三分の一程度残存する。高台を小さく削り出し、口径14.8cm、器高4.5cmに復元できる。見込みには目跡が残り、体部屈曲より上に施釉される。焼成は硬質である。

磁器（10） 染付の小皿で、近代の所産である。見込みに花文があり、時計回りに菊、椿（もしくは山茶花か）、梅、水仙が型押しで描かれる。呉須は文様に筆で点状に乗せるのみとなっている。「東美濃國妻木各務造」の銘がある。

瓦（11） 瓦は近代のもの数個体分出土しているが、刻印のあるものを図示した。11は平瓦で、全体に黒銀色を呈する燻瓦である。側面に「諸岡瓦製造人 仁エ門」という製造所の刻印がある。

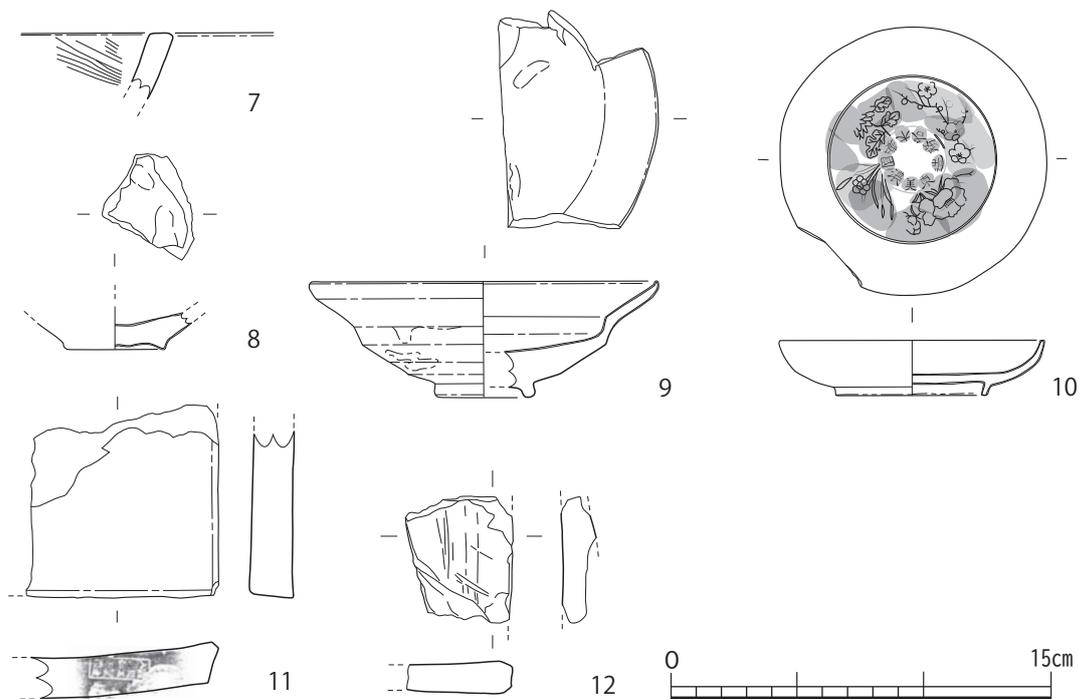
石製品（12） 砥石。小片であるが3面が残存しており、厚さ1.8cmの小さな板状となる。線状の研ぎ跡が残る。



第7図 SK04
遺構実測図（1/40）

（2）溝跡

溝跡は全部で12条確認しており、このうち近世までの遺構はSD01～05の5条である。残りは近代以降のもので、前述のとおり耕作などに伴い掘削されたものと考えられる。



第8図 SK04 出土遺物実測図（1/3）

SD01

調査区の東端で検出した弧状に南北に延びる小溝である。本来は幅 30cm で、断面が直立する小溝で、掘り直したため調査区の北部で枝分かれしたようになっている。また南半は SD03 に吸収される。溝の深さは 30 ~ 40cm を残すが、溝底のレベルから北方へ流れたものと思われる。遺物は土師器や弥生土器が出土しているが、小片のみで図示できるものはない。

SD02

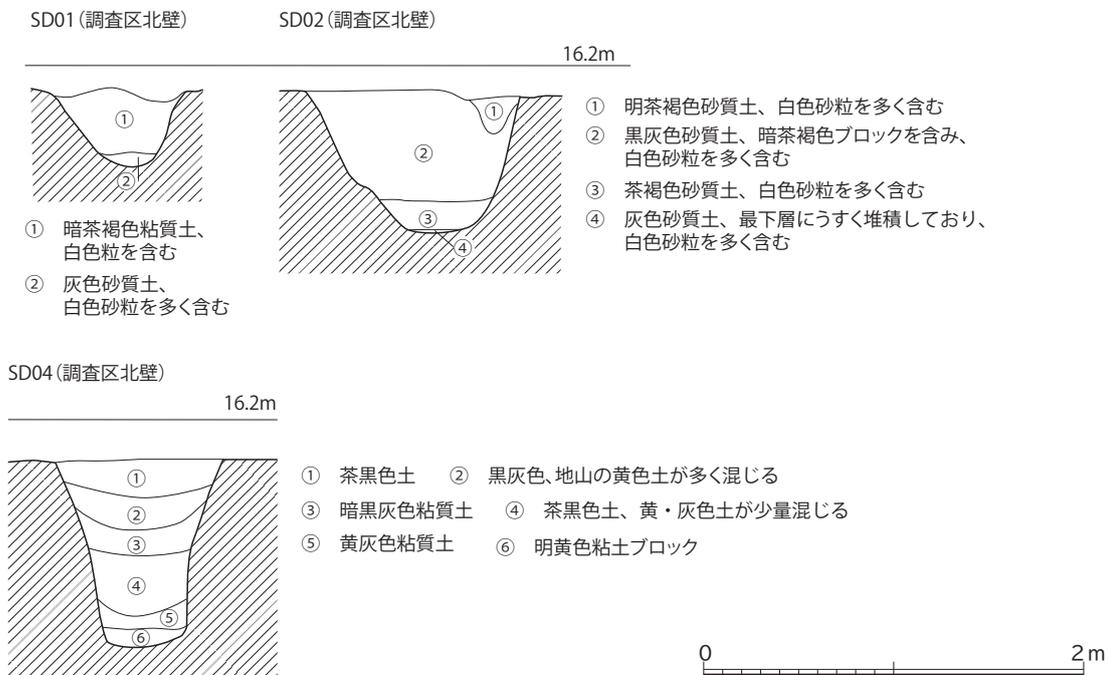
調査区の北東隅に検出した溝で、SD01 に切られる。幅 1 m 前後で逆台形の断面を成し、深さ 70cm と今回調査の溝では一番深い。溝底のレベルによると北方へ流れていたものと思われる。遺物は小片のみで図示できるものはないが、土師器の他、近世の陶磁器片が数点出土している。

SD03

SD01 と枝分かれする形状で検出したが、それに先行する溝である。若干西へ湾曲しながら流れる溝で、幅は大略 1 m を測る。断面は V 字型に近く、深さは 40 ~ 50cm を残す。この溝も溝底のレベルから北流したものと思われる。SK02 に切られている。遺物は須恵器や土師器が出土するが、小片のみで図示できるものはない。

SD04

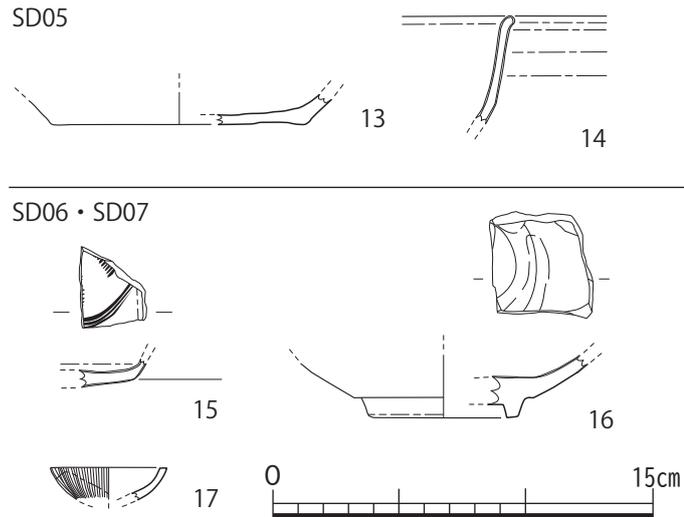
調査区の中央やや西寄りで検出した北西方向へ直線的に延びる溝である。本調査区内ではピットが集中する箇所で、溝肩に多くのピットが絡む。幅 50cm、深さ 30 ~ 40cm を測る。断面は U 字形を成すが、ピットによる出入りが激しい。前述した SD08 ~ SD10 の畝状の遺構より先行する。溝底のレベルは緩やかだが、これも北行すると思われる。遺物は瓦質土器や土師器が出土するが、図示できるものはない。



第 9 図 SD01・02・04 土層図 (1/40)

SD05

調査区の南西隅に検出した方形に廻る溝である。北辺のみ確認したが、以南は調査区外へ延び、しかも新期の溝に切られているため全様は知らない。北辺は約4m、東辺約2m、西辺が2.5mを残す。断面は細長いU字形を呈し、深さ1.1mを測る。新期溝に切られた部分の土層を観察すると、大まかに6層に分けられ、最下部2層が地山由来の黄色粘土混の灰色土と粘土が混入しないシルト状の灰色土と趣を異にし、それより上位は黒褐色灰質土、黒色灰、地山由来の土質を含む茶黒色土、黒灰色粘質土が順に埋まった状態である。



第10図 溝跡出土遺物実測図(1/3)

出土遺物(第10図)

土師器(13) 皿。底部三分の一ほどが残存する。内外面に煤が付着し、特に内面は真っ黒である。底部糸切り。

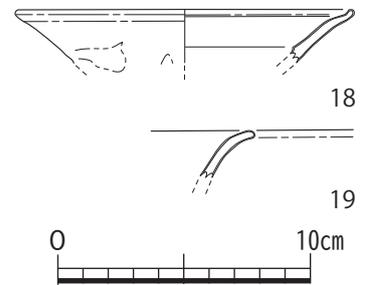
陶器(14) 碗の口縁部である。内外面に灰釉が施釉され、口縁部には釉ダレがみられる。

SD06・07

遺構の性格については前述の通りであるが、近世以前の遺物が数点出土しているため取り上げる。

出土遺物(第10図)

磁器(15~17) 15は龍泉窯系の青磁皿。釉調は青みを帯びた透明感のある緑色で、櫛状の工具で施文する。16は白磁碗。底部径6.0cmに復元される。見込みは釉を蛇の目状に掻きとり、白色の砂目が残る。体部外面より上にごく薄く施釉される。17は青白磁の紅皿。型押し成形され、貝殻状の細かな条線が入る。薄く青みを帯びた釉調で、体部外面より上に施釉される。



第11図 ピット出土遺物実測図(1/3)

(3) ピット

ピットは調査区内でまんべんなく検出されたが、建物として復元できるものは無く、また多くは不整形なものである。

出土遺物(第11図)

陶器(18・19) 18は溝縁皿。口縁部から体部まで三分の一程度が残存する。復元口径13.4cm。19は皿。黄褐色の釉が内外面に施釉される。

IV. まとめ

宝松遺跡では、これまでに本報告を含め5地点で調査が行われており、中世から近世にかけての集落「山田村」の一部にあたることが明らかとなっている。第1次調査では近世の区画溝、第2次調査では中世の溝、第4次調査では平安時代末期の区画溝や掘立柱建物が確認されており、今回の調査でも中世の土坑の他、近世の溝や土坑を確認している。調査区全体の傾向としては近世から近代にかけての遺構が雑多に検出されており、これは第1次・4次調査と同様の状況である。街中であって長期にわたり人的活動が続いてきたことの証左であるが、同時に攪乱による遺構の破壊や時期判定の難しさを引き起こしている。調査地点の少なさや各調査区の面積が小さいこともあり、まだまだ調査の積み重ねと検討が必要な遺跡であるといえる。以下に各遺構の時期や性格について検討を加え、報告のまとめとしたい。

出土遺物は小片が多く図示したものは少ないが、近世の遺構と判断できるものにSD01・02・03、SD05、SK02・03がある。このうち切り合いからSD02→SD01・03→SK02→SK03の先後関係が分かっているものの、出土遺物が少ないため詳細な時期を判断することは難しい。SD02は出土土器片の中に肥前染付が含まれており、胎土・釉薬から18世紀以前のものと考えられる。溝の規模や断面形状は第1次調査SD01に近く、区画溝の可能性はある。SD02の埋没後に掘削されたSD01・03は、溝跡の形状や埋土から北へ流れる流路であったと考えられる。SD04はSD03とほぼ同一方向に調査区を縦断するが、形状や堆積埋土の差違から両者は同時期の遺構ではない可能性が高い。従前の調査も含め、溝跡は御笠川や現況水路と同じく南東―北西方向に走るものが多いため、溝の方向は旧地形に制約されたものであろう。溝跡の中で特異なのはSD05である。コの字状になった溝の区画内にあたる調査区南側には何らかの遺構がある可能性もあるものの、そのほとんどが調査区外に延びており、今回の調査では性格を明らかにすることはできなかった。

また、本調査区では近代以降の出土遺物が多かったが、総量は少ないものの中世の遺物も出土している。ただし、北側の御笠の森遺跡や西側に約50m離れた第4次調査地点で中世の土器や陶磁器が卓越することから、本調査区は当該時期において集落の縁辺部であったものと考えられる。調査区周辺では17世紀における山田村移転以降に人的活動が活発化したとみられ、以後現在に至るまで人々の暮らしが連綿と続いてきたことが推定できる。

第1表 宝松遺跡第5次調査遺物観察表

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)〈残存値〉	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
1	白磁	椀	SK01	②〈2.1〉 ④ (7.0)	内面施釉	A:精良 B:良好 C:胎土 5Y7/1 灰白色 釉 7.5Y7/1 灰白色	
2	土師器	小皿	SK02	① (9.0) ② 1.3 ③ (8.1)	底部外面へラ切り 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C: 内外 10YR8/3 浅黄橙色	
3	瓦質土器	不明品	SK02	②〈3.7〉	外面指オサエ?	A:1mm以下の白色砂粒、微細な雲母を含む B:良好 C:内 7.5YR2/1 黒色～7.5YR7/4 にぶい橙色～7.5YR4/1 褐灰色 外 7.5YR2/1 黒色～7.5YR4/1 褐灰色	2次被熱痕あり
4	鉄製品	円環状鉄製品	SK02	外径 2.9 内径 2.0 最大厚 0.7 重さ 5.5			
5	土師器	椀	SK03	②〈2.4〉	内外面回転ナデ	A:3mm以下の長石を含む B:良好 C: 内 7.5YR7/4 にぶい橙色 外 7.5YR8/4 浅黄 橙色～7.5YR3/1 黒褐色	
6	土師質土器	鍋	SK03	① (42.0) ②〈8.0〉	外面ハケメ後指オサエ 内 面ハケメ後一部指オサエ	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:やや良好 C:内 10YR7/2 にぶい黄橙色～10YR3/2 黒褐色 外 7.5YR3/1 黒褐色	外面煤付着 底部内面煤付着
7	土師質土器	鉢	SK04	②〈2.6〉	外面ナデ 内面ハケメ	A:1mm以下の白色砂粒を多く含む B: 良好 C:内 2.5YR7/6 橙色～10YR8/3 浅 黄橙色 外 7.5YR8/3 浅黄橙色～10YR8/2 灰白色	
8	陶器	小椀	SK04	②〈1.5〉 ③ (4.0)	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:胎土、釉 2.5Y8/3 淡黄色	内外面砂目付着
9	陶器	高台付皿	SK04	① (14.8) ② 4.6 ④ (4.0)	内面～体部外面上位施釉 体部外面下位回転ナデ	A:精良 B:良好 C:胎土 5YR6/4 にぶ い橙色 釉 5Y6/2 灰オリープ色	見込み砂目あり
10	磁器	高台付小皿	SK04	① 10.6 ② 2.2 ④ 6.0	内外面施釉 見込み花文型 押し後呉須を塗り込む	A:精良 B:良好 C:胎土 7.5Y8/1 灰白 色 釉 7.5GY8/1 明緑灰色	砂目付着 刻印 「東美濃國妻木 各務造」
11	瓦	平瓦	SK04	残存長 7.65 残存幅 7.6 最大厚 1.75	側面へラ切り	A:3mm以下の白色砂粒を少し含む B: 良好 C:N4/ 灰色 胎土 5Y7/1 灰白色	側面製造刻印 「諸岡瓦製造人 □仁工門」
12	石製品	砥石	SK04	残存長 3.25 残存幅 2.8 最大厚 1.8 重さ 10.5	砥面 3面残る		
13	土師器	皿	SD05	②〈1.2〉 ③ (10.0)	底部外面糸切り 他は調整 不明	A:1mm以下の白色砂粒 B:良好 C: 内 7.5YR3/1 黒褐色 外 7.5YR3/1 黒褐色～ 7.5YR6/4 にぶい橙色	内面～体部外面 煤付着
14	陶器	椀	SD05	②〈4.3〉	内外面施釉	A:やや粗 黒色粒、気泡含む B:良好 C: 胎土 2.5Y7/1 灰白色 釉 2.5Y6/4 にぶい黄 色	
15	青磁	皿	SD06	②〈1.1〉	底部外面へラ削り 内外面 施釉 内面櫛描き	A:精良 B:良好 C:胎土 2.5Y7/1 灰白 色 釉 10GY8/1 明緑灰色	龍泉窯系青磁皿 I-2c類
16	白磁	椀	SD07	②〈2.5〉 ④ (6.0)	底部外面回転へラ削り 体 部外面中位～内面施釉	A:やや精良 気泡多い B:やや良好 C: 胎土 2.5Y7/1 灰白色～2.5YR5/3 にぶい赤 褐色～5YR8/3 淡橙色 釉 2.5Y7/2 灰黄色 露胎 10YR6/3 にぶい黄橙色	見込み蛇の目釉 剥ぎ 砂目付着
17	青白磁	紅皿	SD07	① (4.6) ②〈1.3〉	内外面施釉 型押し成形	A:やや精良 気泡含む B:良好 C:胎 土 2.5Y8/1 灰白色 釉 5Y8/1 灰白色 露胎 10YR8/2 灰白色	
18	陶器	皿	SP12	① (13.4) ②〈2.1〉	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:胎土 2.5Y6/2 灰黄 色 釉 2.5Y6/2 灰黄色	
19	陶器	皿	SP13	②〈1.9〉	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:胎土 2.5Y7/2 灰黄 色 釉 10YR5/3 にぶい黄褐色	

写真図版



(1) 調査区全景（北東から）



(2) 調査区北半遺構検出状況（東から）

図版 2



(1) SK02・03 完掘状況 (南西から)



(2) SK01 南東壁土層



(3) SK02・03 北東壁土層



(4) SK02 遺物出土状況 1 (南東から)



(5) SK02 遺物出土状況 2 (南西から)



(1) SK04 遺物出土状況 (南東から)



(2) SD02 北壁土層



(3) SD02 完掘状況

图版 4



(1) SD05 北壁土層



(2) SD03 南壁土層



(3) SD06 南壁土層



(1) SD01・03 完掘状況 (南東から)



(2) SD04 完掘状況 (北西から)



(3) SD07・05 完掘状況 (南東から)

図版 6



報告書抄録

ふりがな	ほうまついせき 3
書名	宝松遺跡 3
副書名	
巻次	
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 214 集
編著者名	澤田 康夫・龍 友紀
編集機関	大野城市
所在地	〒 816-8510 福岡県大野城市曙町 2 丁目 2 - 1 電話 092 (501) 2219
発行年月日	2024 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村	遺跡 番号	北緯 。'。"	東経 。'。"	調査期間	調査 面積	調査原因
ほうまつ 宝松遺跡	ふくおかけんおおのじょうし 福岡県大野城市 やまだ 山田四丁目	402192		33° 32' 39"	130° 28' 24"	2023年 1 月 10 日 ～ 2 月 27 日	66m ²	記録保存

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ほうまつ 宝松遺跡 第 5 次調査	集落跡	近世～近代	溝跡・土坑	土師器・陶磁器	

要約	<p>宝松遺跡は御笠川左岸の微高地上に広がる中世から近代にかけての集落遺跡で、『筑前国続風土記拾遺』に記載された旧山田村にあたと推定されている。</p> <p>今回の調査では、溝 12 条と土坑 6 基、その他複数のピットを確認した。このうち近世の溝 SD02 は区画溝の可能性があり、SD02 を切る溝跡や土坑などが多数確認されていることから、調査区周辺では近世以降に人的活動が活発化したと考えられる。</p>
----	--

大野城市文化財調査報告書 第214集

宝松遺跡3

令和6年3月31日

発行 大野城市

〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 九州コンピュータ印刷

〒815-0035 福岡市南区向野1丁目19番1号